

## 医者の目で見た「患者学」

想い出の診療風景（沖縄タイムス社出版部）

「生・老・病・死」と表現される人生の旅路を直線で考えるか、一つの輪としてとらえるかは人生観の基盤をなすものかもしれない。

科学は、特に医学は周産期の医学としての産科学、新生児学に始まり、小児科学、そして生活習慣病としての糖尿病、高血圧、脳卒中、心筋梗塞、「がん」等への対応として内科、外科、整形外科、婦人科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、精神科などがあり、また細分化された個別の疾患単位での分野があり老年病学へと直線的に展開されてきた。

宗教は「死・病・老・生」と医学とは逆の回転で「時」をとらえる。すべての生命には、寿命というものが存在することを前提として「生」をとらえていく。いずれにしても「老い」と表現される時の流れは止まることを知らず「時」を刻んでいく。桜が咲き、そして散るように。

国立医療の特殊性から、著者は「がん」と「神経難病」の患者さんとの出会いの連続があった。両者とも厳しい疾患である。短期決戦と持久戦の戦場は「時」の流れに差違があり、病気のとらえかたとその悲喜こもごもの生きざまの中に、人の「生」に意味を与える多くの示唆に富んだ現実、各論を経験することになる。

そして自らも「がん」を患う。「医者と患者」、「患者と医者」の狭間で、現実を直視することの大切さと支え合って生きることの大切さを患者さんから学ぶ。患者さんが良き友、良き師であることに気づく。現在の段階での区切りとして、「人は皆、患者」かもしれないとの位置づけに立つ。

経済優先の社会は、「生」のみに意味を与え、「老・病・死」を敗北としてとらえ、克服せんとしてあがいてきた。本来の真の宗教ではなく、金銭教（マネー教）のはびこった社会である。できあがった社会は、混沌とした社会である。自殺があり、親が子を、子が親を殺す不可解な殺伐とした世相である。

西洋から輸入された「死生学」(Thanatology)と、それを支える「自己決定権」の問題は、沖縄の「ゆいまーる」の社会に受け入れられ、根付くものであろうかという疑問をいだくようになった。もしかすると、人は不完全な存在として「患者学」としてとらえて、個々の生き方を考えていくことが「ゆいまーる」の社会には受け入れやすいのではないかと考えるにいたる。

「患者学」に紹介された具体的な患者さんの必死の闘いの中に、多くの方々が自らの「生」について考える糸口を見いだす機会となることを期待してまとめられた診療風景である。